

待望の九州初V

初日のイーグルで勢いに

《第44回九州ジュニア15～17歳の部男子》

通算7アンダー 137

呉屋 陽星（エナジックススポーツ高2年）



今大会の出だしは最悪だった。インスタートの10番ミドルでいきなりのOBでダブルボギー。続く11番ショートでもボギー。2ホールで3つの負債である。ただ、呉屋は慌てなかった。「つらいスタートでしたが、焦らずに淡々とやっていこう」。そして迎えた13番ミドル。残り110ヤードの第2打が直接カップインしてイーグル。「あれがデカかった」と息を吹き返した。後半のアウトでは5バーディー、ノーボギーの31をマークして、初日の首位に立った。

最終日も6番ミドルで第1打を左OBしてのダブルボギーはあったものの、唯一人2日連続の60台となる69。2位に3打差をつけての九州初制覇である。「九州がつく大会を勝ちたいと思っていたので、めちゃめちゃ嬉しい」と昨年3位からのステップアップに喜びを表した。これまでのベストスコアは今年の九州アマ予選でマークした「6

3」。2日間の最少スコアは8アンダーという。

ゴルフは祖父の影響で5歳から始め、小学4年から地元沖縄のエナジックゴルフアカデミーに入る。現在はエナジックスports高の通信制2年で午前中から夕方まで練習に明け暮れる。「練習が楽しいから飽きない。自分はゴルフしかできないから」とゴルフ一直線だ。得意はアプローチやパットなどの小技。ドライバーの平均飛距離は240～250ヤードと、いわゆる飛ばない部類。「あと30～40ヤードは欲しい」と飛距離アップを願う。

昨年、初出場の日本ジュニア（荒天のため2日間に短縮）は通算パープレー140で23位タイ。2度目の今回は10位以内のシードを目指す。

得意コースで2連覇

極度の緊張を克服

《第44回九州ジュニア15～17歳の部女子》

通算10アンダー 134

仲村 梓（エナジックスports高3年）



2年連続優勝の報告を聞いて、思わずウルっときた。仲村は最終組の2組前。クラブハウスで待機していた。「待っている間、心臓がバクバクしていた。昨日も今日もラウンド中もずっと緊張していた。めっちゃ水を飲みました」。極度の緊張が解き放たれた時に、涙がポロっと漏れたのである。今年の仲村は調子が良くなく、久しぶりの優勝争い。そのためか体がこわばるほどの緊張感に襲われる。克服するために水分を摂り、周囲の景色を眺めたりとリラックスに努めたという。

そんな中での2連覇は価値がある。仲村本人も「自信になります」と笑顔を見せる。初日は3パットボギーが2度あったが、3アンダー69。そして最終日が自己ベストタイとなる65。それもボギーなしの7バーディー。通算10アンダー134で、去年の優勝スコア7アンダーを3打も更新した。「ここは得意なコース。いいイメージがあるし、回しやすい」と相性も味方した。

今月の16日から3日間、プロテストの一次予選（西日本CC）に出場。初日は76も叩いて「カットラインよりも下」と落ち込んだ。結果的には26位タイで2次予選に進出するのだが、その時に学んだのが適度な緊張感。「（初日は）緊張感がなかった。少しは持つようにしないと。九州ジュニアは緊張していたけど、そんな中で好スコアを出して優勝したのは自信になります」と実りのある2日間となった。

去年の日本ジュニアは通算7アンダー135で優勝に3打足りずに2位タイ。狙うのは頂点。そこで勢いをつけて9月のプロテスト2次予選に臨む。

余裕の初優勝

ショートで「7」も2位に3差

《第44回九州ジュニア12～14歳の部男子》

通算5アンダー 139

林田 聖也（沖学園中2年）



34ホール目の最終日16番ショート（202ヤード）。林田の第1打はグリーン右奥のバンカーの傾斜に突き刺さった。第2打はバンカー内の中央に転がすだけの状態だった。ここから数回ホームランを繰り返して、結局6オン1パットの「7」。今大会バンカーに入れたのが初めてだったために砂の具合が分からなかったという。

そんな大叩きがあっても、最終日は1アンダー71。通算では5アンダー139で2位に3打差、余裕で逃げ切った。初日が2位に4打差の68。1人だけ違うゴルフをしている感じさえ伺わせた。「ドライバーを含めショットが良かった。パットは短いのは入らなかったけど、長いのが入った」とラウンドを分析した。

ドライバーショットの打ち方は初日のスタート前に変えた。通常ならそんな変化は怖くてできないものだ。それまではボールを左足かかと前にセットし、ハイドローを打っていた。それを真ん中から1個分ボールを左側に寄せ、中弾道のいわゆるスティンガーにすると、球筋が安定し、ランも出て飛距離が260ヤードから265～270ヤードに伸びたという。

九州のゴルフ界では有名な林田3兄弟の末弟。2年前、小6の時に九州小学生大会を制した。この1年間で身長は8cm伸び175・5cm、体重は5kgプラスして77kgに。昨年10月からは体幹を鍛えるトレーニングを取り入れており、他の中学生と比べても大きさが際立つ。「いっぱい寝ていますから」と笑った。

初の日本ジュニア出場。「行けるところまで行って、上位を目指したい。もちろん、優勝を狙いたいです」と鋭い視線を送った。

がまんの初優勝

母のアドバイスが奏功

《第44回九州ジュニア12～14歳の部女子》

通算1オーバー 145

黒津 心音（日章学園中3年）



初優勝のプレッシャーはゴールが近づくにつれて大きくなる。残り4ホールを残して同じ最終組の嶋田もみじ（碓井義務教育学校1年）を5打リード。しかし、6番から3連続の3パットボギー。「追われる立場は初めて。手が震えて、腕の力が抜けてしまった。1～1・5mのパットを外して…」。8番が終わって嶋田とは2差に縮まったが、最終9番で黒津が1mのバーディーパットを沈めて逃げ切った。

「母は負けず嫌いで宝塚の厳しい環境の中でやってきた。『最後まであきらめてはいけない』と言われ、いつもメンタル面を教えてくれる。そのお陰です。去年はビリでした」。昨年のこの大会は28オーバー172で予選通過者の中で最下位。それが1年で頂点に立った。母・友紀さんに感謝してもしきれない。

友紀さんは湖城ゆきのの芸名の元タカラジェンヌ。母の影響で黒津は小3まではダン

スやバレエを習い、宝塚を目指していた。しかし、「私には合わないな」とその後は祖父・野村年秋さんが励んでいたゴルフに方向転換。野村さんは日本アマの出場経験があり、九州ゴルフ連盟の競技委員も務めた。祖父は黒津の師匠であり、今大会にも同行。「今はゴルフ。プロを目指します」と目標ははっきりしている。ちなみに、父・勝さんは元Jリーガーで、川崎フロンターレなどに所属していた。

身長166cm。持ち味は平均飛距離250～260ヤードのドライバー。「70の前半で回って、最後まであきらめないゴルフをして、悔いの残らないプレーをしたい」と初出場となる日本ジュニアの舞台に立つ。

【あつまる阿蘇赤水ゴルフ倶楽部】

